広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	主語省略 ： 日本語・現代ギリシア語対照研究
Author(s)	浮田, 三郎
Citation	ニダバ , 16 : 10 - 18
Issue Date	1987-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047180
Right	
Relation	

論　文

主語省略－日本語・現代ギリシア語対照研究

浮　田　三　郎

1．はじめに

主語省略といったことに限らず、日本語の主語に関わる議論は今までも多く成されてきている。佐久間鼎の文法によれば、「主語は、構文の成立には必ずしも必要ではない」[1]し、三上章（1972）[2]では、「主語というのは日本文法にとって無益有害な用語であるから、一日も早く廃止しなくてはならぬ」と主語廃止論が唱えられている。こうした大先輩の後を受けて、久野暲氏、仁田義雄氏、樋上勲氏など多くの研究者により、主語に関わる有益な研究が進められてきた。

今回の考察では、こうした諸先輩の議論を踏まえながら、日本語の主語(あるいは主題)の省略に関して、現代ギリシア語の主語省略文を対照させながら、整理して検討することにより、日本語と現代ギリシア語の主語省略文の類似点と相違点を明らかにし、主語の省略と顕在の特質を考察してみる。特に、両語における人称代名詞の主語の省略と顕在に関して見ると、様々な観点から、類似点と相違点が興味深く観察される。

なお、本稿は、第16回西日本言語学会（1986年9月6日、於中国短期大学）で口述発表した内容に加筆、修正したものである。

2．主語省略と談話法規則

三上章氏の日本文法における主語廃止論は、大いに興味が持たれているようであるが、伝統的な国語学者の正面からの主語廃止論反対論とかいったものが議論されるのも、また大いに興味が持たれ、期待されているようである。ただし、本考察では、今のところ主語という語を廃止して、日本文法を議論すべきではないと思う。

そこで、本稿では、久野暲氏、寺村秀夫氏などの諸先生方の述べておられる如く、主語（「．．．ガ」、「．．．ハ」でマーク）と主題(「．．．ハ」でマーク）を認めた上で、論を進めてみよう。

久野暲（1978）[3]では、「今迄、文の要素の省略の問題は、「主語の省略」とか、「目的語の省略」という様に、構文法的な条件を基盤にして研究されてきた。然し、日本語に於ては、主語も、目的語も、与格目的語も、位置詞も、動詞も、文のどんな自立構成要素

も、省略できる。従って、構文法からの省略の条件付けを研究しても、余り有益なジェネラリゼーションは出て来ない。「省略」は、根本的には、談話法上の問題である」と述べられており、省略に関する談話法規則が仮説を含めて提唱されている。

この談話法規則は、非常に有益であり、これを踏まえて、主語の省略に関して論を進めてみたい。

3．日本語と英語における主語省略対照比較

例えば、次の一節は『雪国』[4]の一部であるが、英語訳と対照して検討してみよう。

「来ると云ったら、来たでしょ。ねぇ、来ると云ったら来たでしょ。」と腹まで波打つ荒い息をした。

「ひどく酔ってんだね。」

「ねぇ、来ると云ったら来たでしょ。」

「ああ、来たよ。」

「ここへ来る道、見えん.見えん.ふう、苦しい。」

「それでよく坂が登れたね。」

「知らん。もう知らん。」と、駒子はうんと仰反って、轉がるものだから、島村は重苦しくなって、起き上ろうとしたが不意に起されたことゆゑふらついてまた倒れると、頭が熱いものに載って驚いた。

「火みたいぢゃないか、馬鹿だね。」

「さう？ 火の枕、火傷するよ.」

"I said I would come and I've come. Haven't I?" Her chest, even her abdomen, rose and fell voilently.

" You're dead drunk."

" Haven't I? I said I'd come and I've come, haven't I?"

" You have indeed."

" Couldn't see a thing on the way. Not a thing. My head aches."

" How did you manage to get up the hill?"

" I have no idea. Not the slightest." She lay heavily across his chest. He found it a little oppressive, especially when she turned over and arched her back; but, too suddenly awakened, he fell back as he tried to get up. It was an astonishingly hot object that his head came to rest on.

" You're on fire."

" Oh? Fire for a pillow. See that you don't burn yourself."

原文（日本文）の方の会話の部分に着目してみると、文中に主語はほとんど顕在しない。それで、ごく自然で、主語に関して解釈に困るようなことはない―少なくとも我々日本人にとっては。英語訳の方を見ると、人称代名詞の主格主語（下線部）がほとんど必ず文中に現れている。この英語の主格主語は、英語文法上の規則によるものであり、なくてはならないものである。ということは、逆にみると日本語文法上の規則では、このような文脈の中の文には、主語は必要ないということになる。

水谷信子（1985）[5]では、日本語の代名詞の使用に関して、「総文節数に対する代名詞

の比率は、 19.7：1、英語の総語数に対する比率8.3：1に比べて頻度はずっと低い」と述べてられいるが、ここに挙げた例では、日本語の文中に潜在していると考えられる人称代名詞の主格主語の省略に関してみると、女史の調査結果をはるかに越えている。ただ、ここに挙げた会話の例は、少し砕け過ぎているからだと言われるかもしれない。

國廣哲彌（1981）[6]では、「英語を学ぶと、日本語にない文法現象がいろいろと出てくる」と述べられているが、主語省略に関しても、日本語と英語とを対照比較してみると、上の資料で見たように、非常に対称的な現象を観察することができる。また、「英語表現では実質的にせよ、つねに主語が表現される。それに対して日本語の表現では主語がしばしば省略される。この省略には少なくとも二つの種類が考えられる。一つは場面、文脈から容易に推測でき、特定の主語が復元できる場合である。もう一つは不特定で簡単に復元できない場合であ」り、前者後者の場合に対して、「日本語にも「主語省略構文」と「不定人称構文」の二つを認めて見てはどうであろうか」と提案されている[7]。

ところで、前述の如く、鈴木英夫（1981）[1]によれば、佐久間鼎氏の考え方は、三上章氏の主語廃止論に繋ってくる。

山口光（1981）[8]では、例えば、‘to lend someone something’と「誰カガ誰カニ何カヲ貸」を日英対応させてみると、「英語では、不定法部分に主述関係ー主格名詞＋定動詞活用語尾ーが加わって始めて文になるが、日本語では動詞語幹「貸」に活用語尾を加えるだけでよいとする。Heも「誰カガ」もともに主格である点に変わりがないが、前者は不定法部分の外に立ち、後者はその内部に含まれているというわけである。」（cf. 三上，1972）などと述べられており、この主張を踏まえて考えれば、主語省略構文というより、日本語には主語（とりわけ人称代名詞の主語）は不必要だと言えそうでもある。

ところで、三上章氏の主語無し文の説明は、現象的にではあるが、現代ギリシア語の主語無し文を想起させる。

4．日本語と現代ギリシア語の主語省略対照比較

さて、それでは、日本語の文における「主語の省略」あるいは逆に「主語の顕在」は、どのような意味を持っているのであろうか。今度は、日本語と少なくとも主語の省略に関しては、表面的によく似た現象を持つ現代ギリシア語の文と対照比較しながら、主語の省略と顕現の特質と意味について考察してみよう。

関本至（1968）[9]によると、例えば、

（1） Αὐτός ἦρθε.　　「彼が来た（来たのは彼だ）。」

（2） Ἐσύ τό λές, ὄχι ἐμείς.「それを言うのは君であって、われわれではない。」

のように、「動詞自身に人称変化があるので、代名詞の主格は強調するときと対比を示すとき以外には使われない」と述べられている。

例えば、次の例文は現代ギリシアの短編小説「外套を取り違えたならず者」[10]の一節で

あるが、原文と日本語訳[11]を対照させながら検討してみる。

'Ο Ντῖνος Λαμπρόπουλος ① δέν εἶχε πιεῖ καί λίγο.

Τώρα ἔχει χωθεῖ μές τή γκαρναρόμπα ② καί ψάχνει νά βρεῖ τό παλτό του.

—Γκαρσόν, γκαρσόν, τί ἔγινε τό παλτό μου; ③

—'Εμένα ροτᾶτε, ἐσεῖς ④ ποῦ τό βάλλατε;

—'Εδῶ τό κρέμασα.

—Δέν εἶναι ἐδῶ;

—Τό βλέπεις;

—'Εσεῖς ⑤ δέν τό γνωρίζετε;

—Μή μοῦ κάνεις τόν ἔξυπνο, δέ σοῦ εἶπα πώς δέν τό ξέρω ⑥ ἀλλά ὅτι δέν εἶναι ἐδῶ.

—Μά δέ μπορεῖ, ἐδῶ θᾶναι.

Χωθήκανε κι οἱ δυό ⑦ μές τά παλτά καί ψάχνανε. Τίποτα!

—Τί χρῶμα εἶτανε; ρωτάει τό γκαρσόνι. ⑧

—Γκρί-νούαρ. Γκρί-νούαρ.

—Μήπως τό ἀφήσατε στό τραπέζι σας;

—Νά σοῦ λείπουν αὐτά. ⑨ Νά τό βρῆς. Εἶσαι ὑπεύθυνος!

—Δέν εἶναι ἐδῶ.

—Δέ ξέρω τίποτα. 'Εγώ ⑩ ἐδῶ τᾶφησα.

—"Α...ᾶ...μιά στιγμή...αὐτός ⑪ θά τό πῆρε. Τᾶχει ξανακάνει, πίνει πολύ, ζαλίζεται καί μπερδεύει τά παλτά, λέει τό γκαρσόνι. ⑫

ディーノス・ランブロープロスは少ししか飲んでいなかった。①

いま、彼は携帯品預り所に頭をつっこんで自分の外套を見つけようと捜している。②

「ボーイ、ボーイ、わしの外套はどうなった?」③

「お客さま、ご自分がそれをどこに置かれたかをわたくしにお訊ねで？」④

「ここにそれを掛けたんだ」

「ここにございませんか？」

「見てくれんか？」

「ご自分のがおわかりにならないのでございますか？」⑤

「利いた風な口をきくな。わしはそれがわからんと言ったんじゃない。ここにないと言ったんだ」⑥

「でも、そんなはずはございません。ここにございますでしょう」

二人で外套の間に頭を突っこんで捜した。ない！⑦

「どんな色でございましたか？」とボーイが訊く。⑧

「濃い灰色、濃い灰色だ」

「ひょっとしてテーブルの上に置き忘れていらっしゃったのでは？」

「余計なことを言うんじゃない。見つけたまえ。きみの責任たぞ！」⑨

「ここにはございません」

「さっぱりわからん。わしはここに置いていったんだ」⑩

「あっ．．．ちょっとお待ち下さい．．．あいつが持っていったんだろう。またやったんです。したたか飲んで、ぐでんぐでんになって、外套をとりちがえたんです」とボーイが言う。⑪⑫

この例に見るように、日本語の場合も現代ギリシア語の場合も、多くの文中に主語が顕

在していないことが分かる。そして、現代ギリシア語の場合、主格の人称代名詞は、対比かなんらかの強調を示す場合に使用されている。

一方、この日本語訳を見ると、原文に引かれている傾向はあるかも知れないが、その雰囲気がよく出ており、現代ギリシア語の人称代名詞による主語の強調が、なんらかの他の形で強調表現されているのが分かるであろう。即ち、原文と日本語訳の間には、人称代名詞の使い方に違いが見られ、より強い強調表現の場合などには、日本語の文の中では、一般の「私」、「あなた」、「彼」などのかわりに、他の形の表現が使用される可能性が高いことが示唆されている。

この例では、日本語訳の場合、主語が文中に顕在している場合は、前述の『雪国』の場合よりもやや多目のようであるが、日本語、現代ギリシア語両方の場合とも、文中における主語の不在に気が付くであろう。これはもちろん、作者自身の文体の個人差によるところも大きい。主語省略の傾向から言えば、例えば、①③⑦⑧⑫の中で、①③⑦は、文脈あるいは主題の設定に必要であろうが、⑧と⑩はさらに省略が可能であろう。主語の復元は十分に可能であるからである。

主語の復元の可能性の観点からみれば、④⑤⑫日本語訳の②⑥の場合も、省略可能であるが、これらの場合は、前述の場合と違い、文意に及ぼす影響が大であるので、これらが省略される場合とそうでない場合では、大きな違いがある。即ち、④⑤⑩のばあいは、日本語、現代ギリシア語両方の場合ともに、ここに強調がなされている。日本語における②は、省略されてもほとんど文意には影響が無いが、⑥は原文のニュアンスからも対比と強調のため顕在しなければならないのである。

⑤は、現代ギリシア語では、強調の主格主語であるが、日本語訳のばあいは、そのニュアンスを取るために、「ご自分のが」といういわゆる対象格の形で出現している。

また、⑪は、現代ギリシア語の場合は、強調の3人称の人称代名詞の主格主語であるが、日本語訳の場合に表現されているように、「あいつ」といったような意味になるほど強調と指示性が表現されているのである。

このように、現代ギリシア語の関本(1968)での法則を、そのまま、日本語の場合にあてはめることは危険であるが、大いにこのような傾向があることは認めてよい。

ちなみに、古典ギリシア語の場合にも、ほぼ同様なことが言える。竹島俊之(1985)[12]では、スミスの随意規則 The nominative subject of the third person may be omitted「3人称の主格主語は省略してもよい」に対して、「私の主張は、この規則は「人称の標識だけが問題になるときは人称代名詞は用いてはならない」という義務規則でなければならない、ということである。」と述べられている。

上記の例などから見ても、現代ギリシア語の場合も、3人称に限らず人称代名詞の主語の省略対しては、このように積極的な法則があると考えてよいであろう。

5．日本語の文における人称制限

ところで、仁田義雄（1975）[13] では、日本語の文の表現類型と人称制限との関係について、文中の主格の人称制限は、文末構造のあり方によって決まってくると述べられている。それを簡単な表にまとめてみると、つぎの如くなる。

文類型	文末構造のあり方	主格の人称制限
表出型	＜意志表現＞ ＜感情感覚表現＞	自称詞のみを取る
訴え型	＜命令表現＞	主格は顕在化しないが、潜在の主格は対称詞
	＜希求表現＞	対称詞または他称詞
	＜勧誘表現＞	対称詞（sing.pl.）あるいは自称詞（pl.）
演述型	状況描写文	他称詞のみを取る
	判断文	主として他称詞、自称詞、対称詞も取る

また久野（1978）[14]によると、「日本語の内部感情を表わす形容詞・形容動詞は、その主語として話し手の視点が完全に一致するような話し手自身しか取り得ない」。例えば、

（3）a.　私は淋しい。　　b. *君は淋しい。　　c. *太郎は淋しい。

疑問文の場合は、

（4）a. *私は淋しいか。　b.　君は淋しいか。　c. *太郎は淋しいか。

のごとくである。

さらに樋上勲（1979）[14]では、「天候や気温をあらわす文や時刻をあらわす文は、英語では非人称の it を主語に用いるが、日本語では通常、主語をいわない」と述べられている。例えば、次のような文を考えてみることができる。

（5）a. 寒い（です）。　（　b. 今日は、寒い。）

（6）a. It's cold.　　（　b. It's cold, today.）

以上のように、日本語の文も相当多くの文が、文末表現（構造）により、その文の主格（主語）の人称制限が行なわれていることが分かる（cf.仁田,1975）。従って、このような文中においては、その文の主格（主語）は省略されても、文意の理解に少しも影響は無いのである。むしろ、わざわざ言い立てない方がすっきりする場合が多いのである。

ところで、現代ギリシア語の場合も、人称代名詞の主語は顕在しないのが普通であるが、特に非人称の代名詞は主語として顕在しない。ただ、主語の人称は、動詞の語尾変化によって、明確に規定されている。例えば、上記の例文に対応した現代ギリシア語の文を考えてみると、

（7）a. Κάνει κρύο.　　（b. Κάνει κρύο, σήμερα.）

のように、動詞の語尾変化（下線部）が、この文の主語の人称を明示しており(cf.後述)、人称代名詞の主語は、必要が無いのである。それは、この動詞の語尾変化 ει が、英語の主語Itの役割りを充分果たしているからであろう。ただし、 ει が非人称主語の動詞語尾

変化なのか、Itが非人称の代名詞の主語なのかは、構文的なレベルあるいは文脈的なレベルでしか判断ができない。

述部（動詞）の人称制限によって人称代名詞の主格主語の省略が容易になっているという点では、現代ギリシア語に限らず古典ギリシア語、ラテン語などや、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語などと同様なことが言えるであろう。

6．日本語の文脈による主語の決定

さらに、日本語の場合、敬語表現や謙譲表現などでは、一般には、多くの場合、主語は自ずと決定されており、主語は顕在しないのが普通である（cf. (8),(9)）。

（8 ）A^1：京都には行かれたことがありますか。
　　B^1：ええ、行ったことがあります。
（8′）A^2：あなたは、京都には行かれたことがありますか。
　　B^2：ええ、私は、行ったことがあります。
（9 ）A^1：Ἔχετε πάει στό Κιότο;
　　B^1：Ναί, ἔχω (πάει ἐκεῖ).
（9′）A^2：Ἐσεῖς ἔχετε πάει στό Κιότο;
　　B^2：Ναί, ἐγώ ἔχω πάει ἐκεῖ.

人称代名詞の主語が顕在する場合は（(8′),(9′)）、先程見たようにそこに強調か対比の意味が込められている。

（10）のような会話においては、多くの場合 aの対応であるが、文脈によっては bの対応もありうる。（10）を現代ギリシア語に翻訳すると（11）A^1～A^4 ― B^1～B^4の表現が考えられるが、現代ギリシア語の場合、主語の人称は、動詞の語尾変化により、はっきりと規定されている。しかし、これらの場合でも、人称代名詞の主語が顕在した場合は、意味合いが違ってくる。

（10）行きますか。　――　はい、行きます。
　　a. 二人称 sing. & pl. ―― 一人称 sing. & pl.
　　b. 三人称 sing. & pl. ―― 三人称 sing. & pl.

（11）A^1：Θά πᾶς;　――B^1：Ναί, θά πάω.　(ἐσύ ――ἐγώ)
　　A^2：Θά πᾶτε;　――B^2：Ναί, θά πᾶμε.　(ἐσεῖς――ἐμεῖς)
　　――$B^{2'}$：Ναί, θά πάω.　(ἐσεῖς――ἐγώ)
　　A^3：Θά πάει;　――B^3：Ναί, θά πάει.　(αὐτός――αὐτός)
　　A^4：Θά πᾶνε;　――B^4：Ναί, θά πᾶνε.　(αὐτοί――αὐτοί)

（10），（11）と対比して、（12），（13）のような対話では、当然人称代名詞の主語は省略することはできない。これは、前述の竹島俊之氏の主張の裏側からの真であろう。

（12）Ποιός θά πάει; ―― Ἐγώ θά πάω.

—— 'Εγώ.
—— *Θά πάω.
(13)誰が行きますか。 —— 私が、行きます。
—— 私。
—— *行きます。

このように見てくると、現象的には、日本語と現代ギリシア語の主語省略文はよく似ていることが分かったが、必ずしも同じレベルで同類と見ることはできない。今までみてきたように、主語省略文の主語の規定は、現代ギリシア語の場合は、統語論的レベルと談話法規則的なレベルで、また日本語の場合は、文脈や言語的・非言語的な場を考慮した談話法規則的なレベルで見ていかなければならないからである。

ここで、今一度日本語と現代ギリシア語の主語の存在について眼を向けてみよう。例えば、論説文などを読むと、多くの文中に主語(あるいは主題)が顕在しており、主語が明らかにされていなければ、たちまち意味の分からない文になってしまう。例えば、前述(cf. 4)の現代ギリシア語の小説の場合でも、下線①③⑦は、文中に主語として必要なのである。このような文の主語の顕在と潜在は、久野(1978)での談話規則で概ね説明できるが、現実の談話や小説などにおける文の主語の顕在と潜在は、このような談話規則だけではなく、個人的な文体の個人差も影響してくるので複雑である。

ということで、日本語においても現代ギリシア語においても、一般名詞(句)などの主語は、顕在しなければならない場合も多くある一方、特に口語体(話しことば)の文中には、英語の文などには原則的になくてはならない人称代名詞の主語は、顕在しない方が圧倒的に多いと言える。

7.おわりに

以上のように、日本語と現代ギリシア語における主語省略に関しては、類似点も多く、まず久野(1978)の談話の文法における主語の省略の規則は、現代ギリシア語の場合もほぼ適用できるということ、日本語と現代ギリシア語においては、主語の顕在は、文成立規則の必要条件ではないということ、主語、特に人称代名詞による主語は、言語的、非言語的文脈の許す限り、できるだけ積極的に省略するという傾向があり、この傾向に逆行(違反)する場合は、それだけの意味(エネルギー)がみいだせなければならないということが分かった。

また、相違点も明らかになった。即ち、日本語の文においては、人称代名詞が、主語として使用されるのは、主語が省略されると、その場の文脈(言語的、非言語的)から文の主語が復元できない場合(場(文脈)の設定、主題の提出、新情報の提出の場合)か、主語に対比か何らかの強調がある場合であるが、現代ギリシア語の場合は、文の人称代名詞の主語の復元は、文脈(言語的、非言語的)に依らなくてもできるので、日本語の場合と

は異なり、人称代名詞の主語の顕在は、その主語に、日本語の場合よりもさらに強い対比あるいは強調があるようである。言いかえると、現代ギリシア語の場合は、文の人称代名詞の主語の復元は、文脈（言語的、非言語的）に依らなくてもできるので、その主語に対比か何らかの強調がない場合は、人称代名詞の主語は、顕在しないのが普通である。

現代ギリシア語の場合も日本語の場合も人称代名詞の主語の省略は非常によく行なわれるが、現代ギリシア語の場合は、動詞の語尾によって、主格主語の人称は明確に規定されており、従って3人称の主格主語の場合も、文脈により主語の復元が可能な場合は、主格主語は、必要ないのである。一方、日本語の省略された人称代名詞の主語の復元は、文脈と文末表現によって可能なのであり、日本語の場合は談話法的なレベルで考えなければならないが、現代ギリシアの場合は、統語論的なレベルと談話法的なレベルの組合わせで判断していかなければならない。

注と参考文献

1）鈴木英夫，「佐久間鼎の文法」，『言語』，Vol.10,No.1,1981,p.56,cf.佐久間1938

2）三上章，『現代語法序説』，くろしお出版，1972，p.74

3）久野暲，『談話の文法』，大修館，1978，p.7

4）サイデンステッカー，E. G.，那須聖，『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』，培風館，1962，p.80

5）水谷信子，『日英比較話しことばの文法』，くろしお出版，1985，p.62

6）国廣哲彌，「英文法から日本語を見る」，『言語』，Vol.10,No.2，1981，p.56

7）ibid.，　p.61

8）山口光，「三上章の文法」，『言語』，Vol.10,No.1，1981，p.67-8，cf.三上1972

9）関本至，『現代ギリシア語文法』，泉屋書店，1968，p.74

10）Κώστας Βαλέτας, "Ο παλιάνθρωπος πού μπέρδενε τά παλτά ", 1964

11）関本至，『現代ギリシア語短編小説選集』，溪水社，1980，p.133-134

12）竹島俊之，「古典ギリシア語の人称表現の実体」，『広島大学総合科学部研究紀要』Ⅴ，第11巻，1985，p.90

13）仁田義雄，「表現類型と人称制限」，『島田勇雄先生退官記念ことばの論文集』，前田書店，1975　p.288-298

14）樋上勲，「主語と主題」，『英語と日本語と一林栄一教授還暦記念論文集』，くろしお出版，1979，p.318

・久野暲，『日本文法研究』，大修館，1973

・寺村秀雄，『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』，1982；『同，Ⅱ』，1984，くろしお出版

・三上章，『文法小論集』，くろしお出版，1970

・山田孝雄，『日本語文法学概論』，宝文館，1936